歴史紀行

なごや 戦災復興の物語

…名古屋の街はこうしてつくられた…

池田　誠一

【5】中心人物・田渕さん…実現を支えたもの

1 田渕氏の前任者

名古屋の戦災復興というと必ず田渕寿郎氏の名が出ます。終戦時の市長だった佐藤正俊氏は、三重県に疎開していた田渕氏に何度も手紙を出し、まさに三顧の礼をもって迎えました(写真)。田渕氏は、3年程前に内務省の

平和公園の平和堂内に並べられた歴代市長像の中の佐藤市長

名古屋土木出張所長、今でいえば国土交通省の中部地方整備局長の地位にあり、当時、市の助役だった佐藤市長と面識があったのです。

9月も終わりに近い日、名古屋市役所を訪れた氏は、市長から戦災復興の全般をみることを依頼されました。そして10月10日、中国の双十節の日に、特別に新設した助役クラスの「技監」というポストに就任しました。

ところがこのような進展の裏に、その前任者ともいえる人がいたことはあまり知られていません。その人、花井又太郎氏は、大学が田渕氏と同じ東大の土木で、2年先輩でした。昭和6年から土木部長、局長を経て、17年助役になりました。まさに戦前の名古屋の街づくりを引っ張ってきた人だったのです。

そのような、外から見れば最適任者ともいえるような人がいる中で、佐藤市長はなぜ外部から、2年後輩の田渕氏を招致したのでしょうか。今回はこんな疑問を持ちながら、名古屋の戦災復興で田渕氏がどんな役割を果たしたかを考えてみたいと思います。

2 田渕氏の経歴と仕事

(1)経歴ー偶然の名古屋

田渕氏は、明治23年広島県に生まれました。10男で、十郎となるところ寿郎となったそうです。五高(熊本)から東大の土木に進み、山形、京都と二つの府県に勤めた後、内務省に入りました(図1)。その後、秋田、大阪等を廻ってから中国に派遣されました。そこで南京、上海等の復興計画等に携わった後、昭和14年、後任と交代して名古屋の土木出張所長

年　　月	事　　項
明治 23 年 3 月	広島県大竹町で生まれる
42 年	第五高等学校(熊本)入学
45 年	東京帝国大学土木科入学
大正 4 年	同大卒業、山形県庁に就職、6 年京都府へ
8 年	内務省に入り、秋田土木、大阪土木、等へ
昭和 11 年	仙台土木出張所長
13 年	中支派遣軍＜上海、南京の復興計画等＞
14 年 3 月	名古屋土木出張所長(49 歳)
17 年 5 月	華北政務委員会＜北京の都市計画等＞
20 年 5 月	中国より帰国、三重県に疎開
20 年 10 月	名古屋市技監(理事・施設局長、55 歳)
20 年 同	千種区覚王山の寮に
22 年 3 月	瑞穂区白羽根町の公舎へ
23 年 2 月	名古屋市助役
33 年 4 月	名古屋市助役を辞任(68 歳)
41 年	名古屋市名誉市民、第 1 号に
49 年 7 月	逝去 (84 歳)

(文献②、③、④等から作成)

図 1　田渕寿郎氏の略歴

に就任しました。そして、その偶然ともいえる名古屋勤務 3 年の後、今度は北京に赴任したのです。専門は河川工学でしたが、南京、北京等の都市計画に携わるなど都市計画でも国際派でした。

20年 5 月、留守宅が被災したこともあって名古屋に戻り、三重県に疎開しているところで終戦になりました。そこで佐藤市長から声がかかり、結局は昭和33年に退任するまで、13年間にわたって名古屋市の戦災復興や街づくりの実質的な責任者でした。

(2) 仕事―「半自叙伝」から

これまでに紹介した百米道路や墓地移転の他にも、戦後の名古屋市の事業の中で、田渕氏ならではと考えられる仕事がいくつもあります。生前に自らの半自叙伝として書かれた本(文献①)から拾ってみると次のような項がありました。

①「倍になった戦災面積」
②「アメリカ村余恵」
③「金山橋を中心に」
④「国体を開く」
⑤「兵舎跡を官庁街」

①は、国が市内の戦災面積を小さく見積もったのに対して、戦災後の畑作地は戦災範囲だと主張して見直しを迫ったものです。結局、復興面積は650万坪が1300万坪になりました。この主張が通った裏に、氏と国の復興院総裁や次長との旧知の間柄がありました。その点では④も、国体を所管した日本体育協会の会長(後に都知事になった東氏)との友人関係が決め手になったといいます。

②は、当時絶対的だった進駐軍が宿舎用地として本重町(現在の錦三丁目)を要求してきました。それに対し、自分の中国駐留経験から白川公園でも問題ないと判断し、変更を求めて認められました。もし本重町にアメリカ村が出来ていたなら、地下鉄計画が遅れるなど復興に大きな障害になっていたでしょう。

③は、終戦直後に金山で開催された花火大会を見に行った帰り、群集の消える早さから金山の好立地に注目したのです。それから金山を総合駅にすることを思いついたといいます。⑤も、兵舎跡の一部を東京のような官庁街にするという思い切った発想でした。

(3) 田渕氏だったから

以上の例からも判ることは、まず氏が国とつながっていたことです。復興計画を立てるにあたって補助金を出す国に何度も通いましたが、出身が内務省だったことは大きな意味があったと考えられます。また全国を廻り、中国の都市計画にも携わったことは、広い視野とスケールの大きさになったといえます。

もう一つは、氏が名古屋の過去のしがらみを引き継いでいなかったことでしょう。名古屋を白紙でみる事ができなければ、工場が占拠していた金山を拠点にしようとか、分散し

ていた官庁を一つにまとめようなどとは云い出せなかったのではないでしょうか。

前任だった花井助役は、田渕氏に思い切って仕事をしてもらいたいと、氏の就任の1週間前に、任期を残して退任されました。

想像に過ぎませんが、焼け野原になった市街を見渡した佐藤市長の胸に迫ったものは、白紙で、しかも大胆に、50年・100年先の大名古屋を描くことであり、その人材の獲得だったように思えるのです。

3 覚王山の「梁山泊」から

… 覚王山と瑞穂グランド …

田渕氏は来名後1年半程、千種区の覚王山の寮に住んでいました。今回は、復興計画を考えるベースになったその環境と、自ら誘致の旗を振った第5回国体の跡を訪ねてみます。

〈覚王山〉

地下鉄東山線の覚王山駅を出ると、少し西に日泰寺の参道があります。その2本西の細い東北に向かう道が、笠寺と龍泉寺を結ぶ四観音道と呼ばれた古い巡礼道になります。その道を北に進むと、右側に日本で唯一釈迦の真骨を奉る日泰寺が現れます。その先で道が右にカーブする手前に、左に入る道があります。すぐ西から下っており、新しい道路の工事が延びてきています。その計画道路の北、左側の家が、来名直後の田渕氏が住んだ家でした。隣は鉈薬師の静かな境内になります。

覚王山の寮の付近。計画道路がせまっている

垣根越しにみた覚王山寮の跡

寮の中の一室。ここで名古屋の復興が議論された

このお宅を借りて復興計画に携わる市の幹部職員など9人が住みました。そこには連日新聞記者も集まり、名古屋の復興を議論する、まるで「梁山泊」のようであったと『新しい鯱』(文献②)に描写されています。もう無くなったと思っていたお宅は、そのまま残っていました。が、大正の建物の維持は難しく、今存続の危機にあります。名古屋が誇る戦後都市計画のまさに「生誕の物語」の地を残すことができないのでしょうか。

田渕氏は、ここを起点に毎朝1時間ほどの散歩をしていました。行く先は、そこから東の日泰寺の向こうに広がる原野だったといいます。その跡を少し辿ってみましょう。

東に戻り、寺の塀に沿って北から東へとカーブします。もちろん今のような立派な道はなく、当時の地図を見ると、細い道が姫ヶ池に下っています。姫池通を越えてもまだ日泰

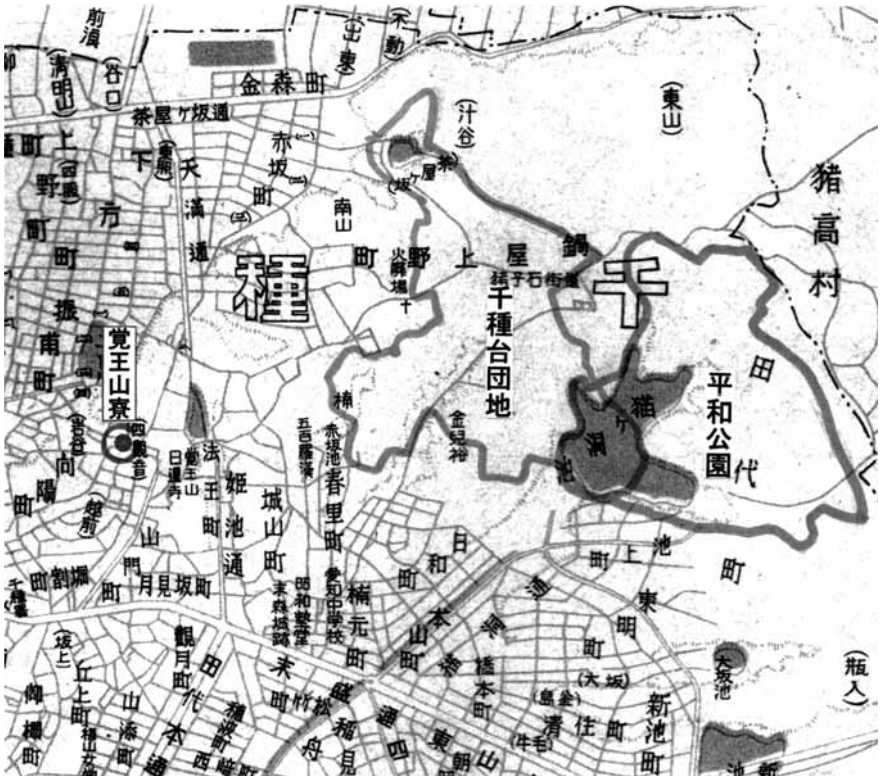

図2　当時の地図でみる、覚王山から千種台団地、平和公園付近

日泰寺の墓地のむこうに千種台団地の建物が見える

寺の区域です。左に釈迦の奉安殿への参道を見て広い道を進みます。右側は末森城の跡に明治以降、市街から移転してきた寺がいくつか固まっています。今は墓地に囲まれてしまったような道を上ると信号で、左からの道が合流します。ほうろく街道とも呼ばれたこの道が、当時はこの辺りの主要道路でした。少し行くと左に寺が現れます。その向こうは墓地で、明治から戦後まで火葬場がありました。

この辺りから東側一帯が、昭和30年頃に開発された千種台団地です(図２)。戦後の住宅不足に対応するために建設された、全国でも最も早い時期の大規模団地です。もちろん田渕氏が歩いた頃は原野でした。少し行くと両側は商店街になり、信号交差点に出ます。千種台団地の中心部です。氏は早足だったそうで、１時間ならもっと足を伸ばせたでしょう。その先は平和公園です。団地には今では地下鉄が通り、建物も第二世代に変わっています。交差点を南に下ると地下鉄の自由ヶ丘駅です。

〈瑞穂グランド〉

名城線の右回りに乗り、瑞穂運動場東駅で降ります。交差点の南北の道路を北に、２本目を左に曲がると下り坂になります。万葉集にある歌の「あゆちの泉」の史跡を通り、坂を

2回目の国体で改修された瑞穂競技場。
この右部分にマラソン塔が立っていた

下って林を抜けると、突き当たるのが瑞穂運動場の主競技場です。この競技場はこの背後の緑が印象的です。左に曲がると競技場の南側に出ます。当初の競技場は8万人入るものといい、この角には9階建というマラソン塔が立って、景観をつくっていました。これも田渕氏のアイデアでしょうか。

昭和25年の第5回の国民体育大会は、名古屋を元気にしようと誘致したものでした。しかし、競技場がなくては、賛同が得られません。田渕さんは、大学のボート部仲間の、日体協、東氏に「どうしても、立派なものをつくる」と約束して誘致に成功したのです。

正面を通って北側に廻ると、山崎川の向こうに画期的だったという練習場が造られています。この他に、金山体育館、振補プール等も、この国体で整備されました。

練習場を北に抜けると旧瑞穂プールです。その手前の道路を西に、信号を越えて一本目を北に行くと直ぐ白羽根町になります。ここに田渕氏が覚王山を出た後に住んだ公舎がありました。半分は畑が欲しいというのが氏の希望だったといいます。西に下り、左に曲ると地下鉄の瑞穂運動場西駅です。

4 実行集団を支えて

書物に出てくる田渕氏の性格面の評には共通する特徴があります。それは、「清廉さ」と「頑固さ」です。信心に篤かったことや絶対後に引かなかったことから、そのような評価になるのでしょう。これにもう一つ加えたいのが、先程書いた「しがらみのなさ」です。

都市計画は、計画よりも実行が難しいといいます。それは実行段階でほんの少しの妥協を許せば、全体が崩れかねないからです。このため計画を実現することは、計画することの何倍も難しいものになります。

田渕氏は、非常に高い志を計画にしましたが、それを実現するにはきわめて困難な作業が必要でした。氏の評価はよく構想の大きさで語られます。しかしそれ以上に大きな成果は、その構想を実現させたことでしょう。そしてそれは、実行集団を引っ張る―というより「支え」ている田渕氏に、先程の、清廉さ・頑固さ・しがらみのなさ、があればこそだったと考えられるのです。

それ故でしょうか。氏は、今でも、親しみを込めて「タブチさん」と呼ばれています。

田渕氏の公舎だった付近の静かな住宅地

〈主な参考文献〉
①田渕寿郎『或る土木技師の半自叙伝』（1962、中部経済連合会）
②田渕寿郎追悼録編集委員会『田渕寿郎氏を偲ぶ』(1975)
③村松喬『新しい鯱　日本人の記録』（1964、毎日新聞社）
④本多編著『男の生き方　田渕寿郎伝』（1990、風媒社）